

### 『四座役者目録』研究会の報告(1)

#### 表, 章

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

183

(終了ページ / End Page)

184

(発行年 / Year)

1983-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020327>

## 『四座役者目録』研究会の報告(1)

### はじめに

能楽師以外の能楽関係者（研究者・評論家・編集者、能楽に関心を持つ演劇人など）の集まりとして昭和41年12月に発足した能楽懇談会は、当初は毎月の例会を活動の柱とし、時どき啓蒙的な講座を開催したりしていたが、昭和50年から講座部会と研究部会を別に設け、例会の他に研究部会主催の研究会が毎月一回開かれるようになった。発足以来事務局が能楽研究所だったし、研究部会担当委員に常に研究所員が選ばれ、研究所を会場とすることが多かったため、この研究会はおのずと能楽研究所と共催の形になった。能楽懇談会の会員ではないが研究会には参加する学生もあり、研究所としては主催行事同様に力を入れてきた。

時どき自由な研究発表をも加えてきたが、研究会の活動の主体は能楽関係古文獻の輪読であり、昭和50・51年には国会図書館蔵『幸正能口伝書』を読んだ。小鼓伝書で難読・難解なこの書を最初に選んだことが、この研究会の方向を決定づけたようである。

52・53年には能の演出資料としては最古に属する『舞芸六輪』を

読んだが、かなり質の高い研究会に終始し、ここでの発表を土台とする幾つかの論考が若い研究者によって生み出されている。

続いて54年からは能楽史料として著名な『四座役者目録』を輪読した。「読む」とは言っても、担当部分に見える役者の活動記録を集成して報告するのが毎回の例で、数ヶ月にわたって広く諸資料を搜索した結果が研究発表に近い形で報告され討議される、高度の研究会であった。会の伝統的性格と参加者の研究意欲の旺盛さのゆえであろう。従って進行は遅く、上巻を読み終えるのに二年間を要した。56年には下巻から各自が関心を持つ人物を選ん で調査することにし、発表希望者が一巡した同年末で一応終了したのである。この間の各部分の担当者は次の如くである。

(上巻分)

「観世方脇之次第」以下四座の脇役者	竹本 幹夫
「観世方太鼓之次第」以下四座の太鼓役者	小田 幸子
「観世方太鼓之次第」以下四座の大鼓役者	三宅 晶子
「観世方小鼓之次第」以下四座の小鼓役者	松岡 心平
「観世方笛之次第」以下四座の笛役者	天野 文雄

「観世狂言之次第」以下四座の狂言役者

「観世太夫代々の次第」

「今春太夫代々の次第」

「金剛太夫代々の次第」

「宝生太夫代々の次第」

宮王太夫宗竹・宮王太夫道三

宮王右衛門・宮王三郎鑑氏

「大藏太夫之事」

春日大夫道郁

(下巻分)

幸四郎次郎・五郎次郎・清五郎・五郎左衛門

大藏道知・大藏道意・大藏平三

「近代観世方太鼓撃之事」

「今春方近代太鼓打之事」

梅若(妙音大夫)・梅若九郎右衛門・同六郎

古津宗印・観世橋右衛門

葛野庄九郎(九郎兵衛)

中村又三郎(一噌似齋)・中村噌庵

牛尾彦六左衛門(玄笛)・牛尾藤八

「近代観世方狂言師之事」

森田長蔵(庄兵衛)

高安与兵衛・同与太郎

以上、この報告掲載の経緯と趣旨、及び凡例的事項を略記した。

小山弘志・中村格・西野春雄・西脇哲夫・羽田昶・松本雍・山木

竹田 裕子

奥山けい子

渡辺 博之

小林 健二

石塚 道子

山中 玲子

小田 幸子

表 きよし

片桐 登

竹本 幹夫

表 きよし

天野 文雄

小田 幸子

渡辺 博之

松岡 心平

山中 玲子

三宅 晶子

牛尾 美江

竹田 裕子

奥山けい子

小林 健二

ユリ、横道万里雄らが常時または時どき参加し、毎回の出席者は

約20名で、討議はすこぶる活潑だった。(参加者の一人岡本芳江氏は57年5月28日に逝去された。謹しんで哀悼の意を表する)。

右の『四座役者目録』研究会での発表には、従来知られていなかった記録の発掘なども含まれ、学界に報告するに足る成果が多かった。口頭発表だけで終えてしまうのは惜しいし、成果を相互に利用するにもレジュメだけでは不便であるとの声もあった。そこで、希望者には発表内容を小論文にまとめてもらい、本誌に掲載することを最終回に私から提案し、参加者各位の賛同を得た。

そして、期日までに寄せられた原稿の内の四篇をまず本号に掲載することにしたものである。次号にも続いて掲載する。

ここに収める小論はいずれも研究会の発表の要旨であり、その後の知見も加わっている反面、紙数の関係で省略を余義なくされている点が多い。書式や略号の統一など、能楽研究所の責任で若干原稿に手を加えてある。特に、今後の分も含めて、左記の形の略号・略称を統一的使用している。

『役者目録』……観世勝右衛門元信編『四座役者目録』の全体。

『役』……右の上巻の「四座役者目録」。

『近』……右の下巻の「近代四座役者目録」。

編者自筆本……観世新九郎家文庫蔵の元信自筆本二冊。

国広原本……観世与左衛門国広編の『四座之役者』。

田中校訂本……田中允氏校訂(わんや刊)の『四座役者目録』。

以上、この報告掲載の経緯と趣旨、及び凡例的事項を略記した。

〔表 章〕